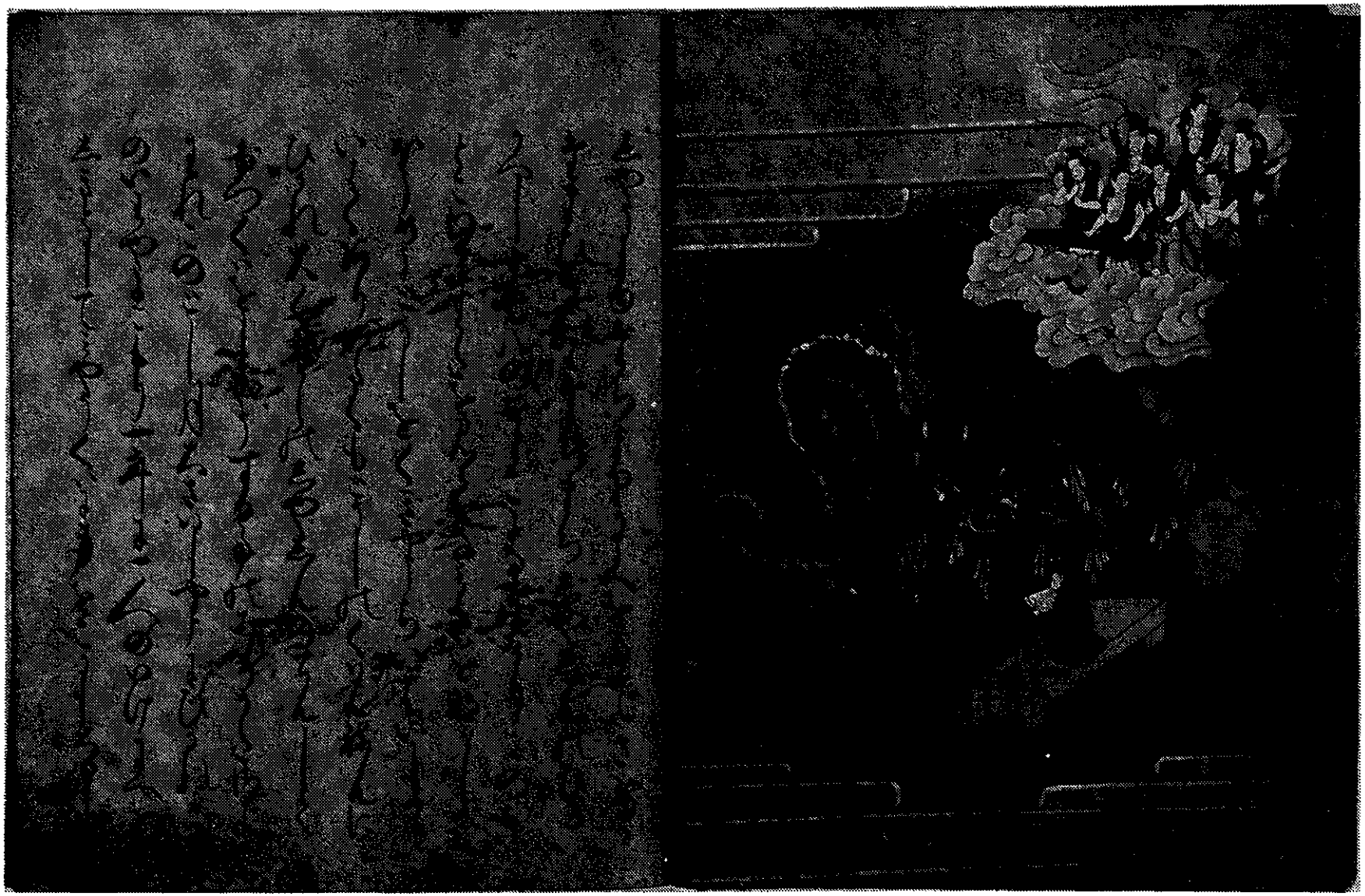
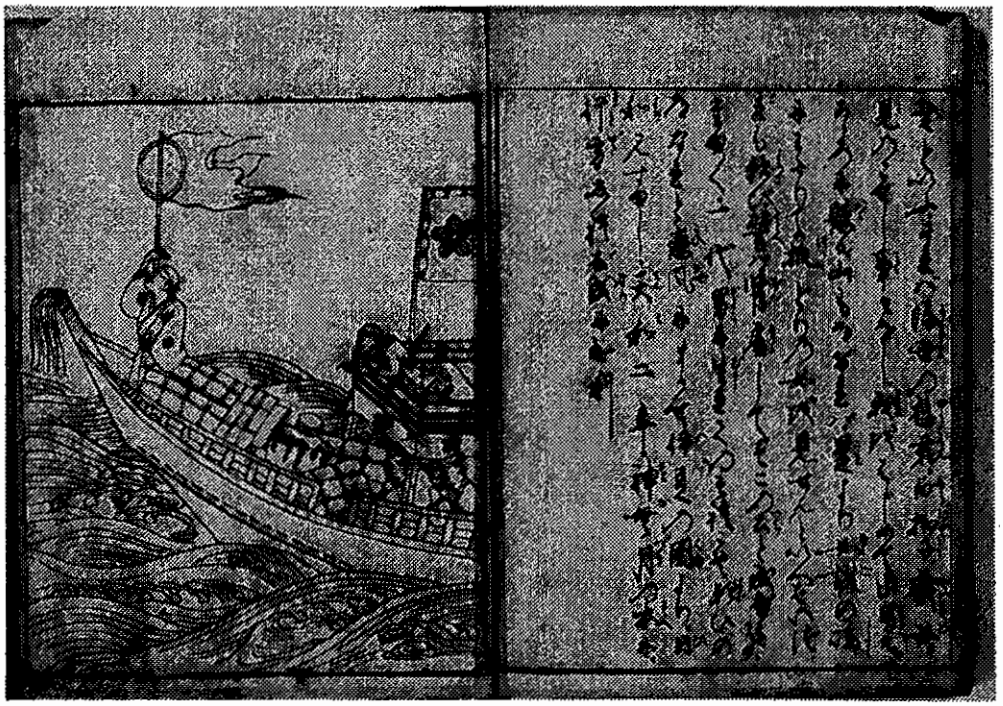
国文学研究資料館特別展示目録　五

―館蔵貴重書展―



ほうみやう童子（P.24　35）

日吉社壇詠二十一首和歌（P．5　9）



好　色　一　代　男（P.26　40）

はしがき

国文学研究資料館は国文学に関する古典籍を調査、研究、収集し、研究者の利用に供することを最も重要な使命とする大学共同利用機関である。そのため、全国および海外にわたってマイクロフィルムによる総合的収集を行っているが、一方で限られた予算の中でではあるが原本（写本、版本）の収集にも努めている。

この目録は特別展示「館蔵貴重書展」（昭和五五年一一月一〇日～一五日）の展示書目を改訂増補し当館所蔵の貴重書の解題目録としたものであって大方の御利用を期待する。ささやかな小冊子ではあっても、この解題目録によって国文学研究資料館が共同利用機関として保存する日本古典籍原本（貴重書）の詳細が世に知られ、大学を中心とする多くの利用者の研究の進展に寄与するところがあれば幸いである。

昭和五六年二月

国文学研究資料館参考室

凡例

一、収録した資料は当館蔵貴重書（昭和五五年一一月までに指定されたもの全三九点中の三八点）に特別コレクション六点と金子武雄氏寄託本四点を加えた全四八点である。

一、目録の記載は次の順序によった。

書名、刊写年、大きさ(単位はcm)、巻冊数、請求番号（貴重書→99、特別コレクション〈国学者自筆稿本等〉→81、金子氏寄託資料→13）。

解説は、初めに作品の分類、その本の特徴等、次に表紙、題簽、装訂、料紙、丁数・行数・字詰め、印記、奥書、識語、伝本等、作品内容、その他について記した。

一、解説は参考室が担当した。諸先学の研究等に負う所が多く、本来一々明記すべきであるが省略させて戴いた。

1　**万葉類葉抄**（江戸前・中期写）縦二七・七×横二〇・三　一三冊　9938

万葉集部類。砥の粉色布目地に、灰、青、金の三色墨流し紙表紙。左肩に「類葉抄一天象部(〜十八器財部)」と記す肌色地の題簽を貼る。袋綴。料紙は薄葉。各巻は墨付（一）六七丁、（二）八一丁、（三）一一四丁、（四）四〇丁、（五）二六丁、（六）四八丁、（七）三八丁、（八之十二）五〇丁、（十三）七〇丁、（十四）六〇丁、（十五）五一丁、（十七）三二丁、（十八）六〇丁。各冊一面十二行、一首一行書き。巻首に「雅豊」の丸陽刻印、その他「岡田真」「月明荘」の印記がある。各冊、奥に「延徳三年依勅命部類之権大納言宣胤」と記す。本写本は、飛鳥井雅豊（正徳二―一七一三―年没、四十九歳）の手択本であり、没年にかなり先立つ書写にかかり、雅豊に蔵せられていた本と認められる。また、すこぶる美本で、保存も極めてよく、本書の重要な伝本として注目される。『万葉類葉抄』は、中御門宣胤（大永五―一五二五―年没、八十四歳）が、延徳三―一四七一―年、後土御門帝の勅命により万葉各巻の歌を十八巻に部類したものである。本書の部類の状態は（一）天象、（二）時節、（三）地儀、（四）居所、（五）諸国、（六）草――巻首に生植上・草部とある――、（七）木――巻首に生植下・木部とある――、（八之十二）飛禽・走獣・昆虫・龍魚・甲虫、（十三）人倫上、（十四）人倫下、（十五）人躰、（十七）衣服・飲食、（十八）器財、の各部となっている。これによって、各項目を一巻とすれば、十八項目十八巻となるようにも見られようが、（八之十二）の如き処置は、欠巻の破綻を隠そうとしたものと考えられ、巻冊数等から、九、十、十一、十二、十六の五巻を欠いて伝来したと考えるのが通説となっている。また、諸伝本も本写本と同様であり、欠巻部分の推定が、今井似閑等の学者によってなされており、入江昌喜は、それを「名所・神祇・言詞」とし『万葉類葉抄補闕』を著している。

2　**古今和歌集**（永正一六―一五一九―年写）縦二九・五×横一九・三　二冊　992

金茶地に鳳凰に花の模様の入る緞子表紙。左肩に「古今倭歌集上(下)」と記す紺墨流しの紙題簽を貼る。列帖装。料紙は中打ちがあるが、斐楮の混漉き。墨付上冊六十丁、下冊六五丁。序は一面十二行、二十三字程、本文一面十二行、一首一行書き。「青谿書屋」「月明荘」の印記がある。奥書に「右集依前内府実望公懇望以家相傳京極中納言定家卿自筆本不改一字愚息為和卿書写之尤可為証本者也　于時永正第十六天初夏上澣日　桑門宗清（花押）」と記されている。上冷泉為和（文明一八―一四八六―年～天文一八―一五四九―年）が正親町三条実望（享禄三―一五三〇―年薨）の求めに応じ書写した由の法名を宗清という父為廣（宝徳二―一四五〇―年～大永六―一五二六―年）の奥書である。なお、二世畠山牛庵の添状一通と古筆の極札二枚が付されている。本写本は、定家、嘉禄二年四月九日書写本（嘉禄本）の系統の本文であり、「冷泉為和自筆本二冊、弘文荘の書目第三號(昭和九年六月)に紹介されている。定家、為家の奥書の次に……前記の奥書、省略……為和の父は為廣である。」と西下経一博士の『古今集の伝本の研究』六八頁に記されたものである。

3　古今和歌集（文明三―一四七一―年写）縦二六・七×横一七・〇　　993

茶色地に大型に牡丹唐草の模様の入る金襴表紙。左肩に「古今和哥集」と記す紙題簽を貼る。これは将軍義政の手という。列帖装。料紙は楮が少し混じる鳥の子。墨付一六〇丁、序は一面九行、一行一九字程、真名序は一面八行、本文一面十行、一首一行書き。一丁表に「谷森蔵書」の印記がある。奥書は「貞應二年七月二三日……」のもの、儀同三司善成のもの等とつづき、そして「此集日邦之周詩也……中略……遂而携比集而以置國則永作西周之鎮護也決矣　文明三禩辛卯陽月下浣日　三井末蓙聖護院准三后道興誌旃　重記依騒乱悤怨三ヶ日暇書之之間後生之嘲寔恥有餘矣（花押）」と記されている。大内政弘（明応四―一四九五―年没）のために山城の聖護院門跡道興（永享二―一四三〇―年～大永七―一五二七―年）――関白近衛房嗣（応永九―一四〇二―年～長享二―一四八八―年）の第三子――

が応仁の乱の余燼が消えないこの年に、三日間で書写したものだという。なお、本写本も『古今集の伝本の研究』五九頁の表中で紹介されており、「……略……北野克氏　大内政弘のために書写、義政題簽を書き、儀同三司（四辻）善成証明を加ふ」とある。少ないながら朱で声点が記されてもいる。

4　古今和歌集（元応元―一三一九―年奥書　写）縦二六・〇×横一七・三　994

葡萄茶地に、金泥雲引き海贈模様の入る紙表紙。左肩に「古今倭歌集」と記す金泥雲引き波模様の入る題簽を貼る。列帖装。料紙は鳥の子。墨付一五四丁、一面十行、一首一行書き。奥書は貞応二年七月廿二日のものにつづいて「元応元年九月九日為門葉相承令書写訖　西方行者頓阿」と記されている。また古筆の証文が付され、それに「古今和歌集全部一冊　頓阿法師真蹟無狐疑者也　應貴命證之　享保一三年仲夏中旬　古筆了延」とある。古筆のいう「應貴命」や書風からも頓阿（正応二―一二八九―年～応安五―一三七二―年）の自筆とは認めがたく、紙質などからみても、かなり時代の下るもの、例えば、外題の筆者の時代に近いと判断される。それは、本写本を収める黒漆塗箱に金泥で「古今和歌集　頓阿法師筆　外題　持明院亜相基時卿」と記されたもの。基時は元禄一七―一七〇四―年、七〇歳で没している。

5　新古今和歌集（南北朝写）縦二四・五×横一七・二　三冊　997

薄茶地に雲竜紋の入る金襴表紙。左肩に「新古今和謌集上(中、下)」と記す藍雲流しの入る題簽を貼る。列帖装。料紙は上、中冊が白斐紙（鳥の子）、下冊は雲母びきの混漉き。墨付上冊一〇一丁、中冊九二丁、下冊一六七丁。真名序、一面八行一四字詰、仮名序、同一六字程、本文一面十行、一首二行書き。奥書なし。各冊見返しに極札が貼られている。上冊は「上乗院殿　深守内親王　新古今自巻頭至六（古筆了雪の墨印）」、中冊「上乗院殿　深守内親王　新古今自六至十（同前）」、下冊「法性寺殿　為理朝臣　新古今自十一至十九（同前）」「顕松院　忍擔筑波集者　新古

今廿巻書継十枚（同前）」である。上冊は巻五までで、中冊は「新古今和謌集巻第六　冬哥」から始まっている。極札は内容表示の誤まりもあり信を置けないが、ちなみに上乗院深守は上乗院寛守を誤認したものとすれば、書風とも関わって南北朝書写の可能性は高くなろう。寛守は、後光厳皇子无品親王で応永八―一四〇一―年に入滅されている。為理は不詳だが、忍誓は新撰菟玖波集に入集、一生、旅を友とした連歌師で永享十二―一四四〇―年宗砌、親当の三吟百韻が知られている。上中冊と下冊の取合せ本であり、忍誓の書継も写本から明白に知られる。

6　続後撰和歌集（永正六―一五〇九―年奥書　写）縦二四・〇×横一六・七　998

濃い金茶地に菊の模様の入る緞子表紙。左肩に「續後撰和歌集」と記す青地に金泥、霞箔散らしに竹笹を描く題簽を貼る。列帖装。料紙は鳥の子。墨付一八一丁、一面十行、一首一行書き。奥書に「右集上下者前天台座主尊應書写尤可為證本者也　于時永正第六天季春仲澣日　桑門宗清」と記す。尊応は百六十世天台座主、三条大相国持基公男である。准三宮、青蓮院、十楽院の門跡。天台座主には文明三―一四七一―年に任ぜられ、明応二―一四九三―年に辞している。永正十一―一五一四―年に遷化。続後撰は第十代の勅撰和歌集、為家の撰で建長三―一二五二―年奏上。

7　新続古今和歌集（永享一二―一四四〇―年奥書　写）縦二九・七×横二一・〇　996

紺青地に金糸で唐草格子、その中に卍模様の入る絹表紙。題簽なし。袋綴。料紙は薄葉。墨付九〇丁、一面九行、一首一行書き。奥書に「此集返納之後以中書之書最前所令写之也可為規模之本者歟　永享十二年八月廿三日和歌所老揃権大僧都堯孝」と記す。和歌所の開闔であった堯孝（明徳二―一三九一―年～康正元―一四五五―年）――頓阿の曽孫――の奥書で、完成した永享十一年の翌年の記述となるだけに注目すべき写本と言えそうだが、問題が少なくない。序を欠き、巻頭巻末を除いては、四季部を中心に詞書がかなり省略されており、歌数も少なく、省略本の体となっているからである。ちなみに、各巻歌数は、巻一（春上）三八首、以下、四二、四一、四九、三六、五三、九、八、

二七、十一、三六、四五、三三、三二、二一、十六、五六、五二、二〇、十二、の計六百四十九首であり、全歌数二千百四十四首（国歌大観）の三分の一弱程である。また釈教部は、羈旅と恋一の間におかれているが、巻数表示に変化はなく、錯巻があったかもしれない。本文に少ないながら異文を含む本であるが、永享の書写とは認め難く、近世初期の写かもしれない。これも問題の一つである。

8　**松花和歌集**　巻第四（江戸初期写）縦二六・七×全長二八七・〇　一巻　99 9

二条派の私撰集。濃縹地に金唐草刺繍の緞子表紙。左上に「嘉元一年　鎌倉時代也」と墨書した小紙片を貼る。本文料紙は楮紙。見返しに続いて巾約九センチの白紙を置き、以下二六・七×二〇・五の料紙を一四枚継ぎ、鳥の子で裏打をする。現在は巻子だが、元来は一面十二行の冊子であったろう。一首一行書き。「松花和歌集巻第四　冬哥　嘉元元年百首哥たてまつりける時　初冬　前大納言実教卿　かたみとて露も残らす花薄昨日の秋の袖の別に」以下六六首。巻頭に「冷泉府書」の朱印記がある。本書は元徳三―一三三一―年頃の成立で為世門の四天王の一人浄弁の撰かともされる。当時の二条派の私撰集として注意されるが、従来は巻一（春）、五（恋上）と断簡（約二三〇首）が知られるだけであったが昭和五二年『国文学研究資料館報』第八号で、本写が紹介され、本文が追加されることになった。なお、翻刻と紹介が福田秀一教授の手で、当館紀要、第四号に掲載されている。

9　**日吉社壇詠二十一首和歌**（文明頃―一四六九～一四八七年―写）縦三〇・八×全長一八一・六　一巻　99 10

竹林抄、七賢の一人賢盛の奉納和歌。青地に銀色の大柄模様の入る緞子表紙。本文料紙は楮紙。見返しにつづいて本文、末尾に四一・五センチ程の余紙。一首二行書き。全六三行だが、十二番目の歌「紅葉深」の左上に一首の同筆と思しき補入がある。箱書に「日吉社奉納和歌杉原宗伊自筆原本　文明頃成」と記され、巻末にも「詠二十一首杉原伊賀守入道宗伊」と記す貼紙がある。宗伊は、杉原七郎伊賀守賢盛（応永二五―一四一八―年～文明一七―一四八五

―年）であり、宗祇の選になる『竹林抄』の七賢の一人として著名である。足利義政の近習番衆で、文武和漢の才に長けた武人であった。一休宗純について参禅、ことに連歌、早歌の名手として知られ、文明三年能阿弥没後に宗匠職についた。本写は、巻頭から「陪日吉社壇詠二十一首　和歌　沙弥宗伊　湖上霞　朝かすみさゝ浪かけて出る日の　にほてる奥にむかふ春哉　残雪　いまもちる峯のあは雪うちかすみ　矢田の枯野に春風そ吹……中略……　苗代　たねひたす水もゆたかに作る田を　民の心にまかせてそみる　鹿聲遙　浦つたひ妻やこふらむ秋の鹿　あはちの波　にこゑの消ゆく……」以下「神祇」まで、類型的な題詠の二十一首である。

10　三部抄（天正十八、九―一五九〇、一―年写）縦二四・〇×横一七・四　99 11

幽斎・昌叱・紹巴、三筆三部抄。鶯色地に緑で宝尽しに龍の模様の入る緞子表紙。題簽なし。列帖装。料紙は斐楮混漉き（鳥の子）。墨付五〇丁。行数は各々異にする。奥書は、詠歌之大概、秀歌之躰大略の後、一九丁裏に天文二年堯空のもの、次の二〇丁表に「右一帖依臨江老人之求以予所持之本奥書見書写之早疑借写功之援者歟　天正十九林鐘下旬　丹山隠士玄旨（花押）」とある。また二八丁裏に「未来記雨中吟花房道悦依所望令書写者也　天正十八年霜月中旬　昌（花押）」とあり、五〇丁表に「此小倉山荘色紙和哥者備州花房道悦咲齋依所望書之者也　天正十八年臘下旬　紹巴（花押）」と記されている。よって、玄旨、細川幽斎（天文三―一五三四―年～慶長一五―一六一〇―年）、里村昌叱（天文一〇―一五四一―年～慶長八―一六〇三―年）、里村紹巴（永正四―一五二四―年～慶長七―一六〇二―年）の三筆、三部抄なることが知られる。花房道悦は、又左衛門越後守正幸（まさよし）といい、宇喜多家に仕え、備前虫明一万八千石を領した武人で、慶長十年に八十二歳（或説に八十）で没している。歌道に志あつく、幽斎に古今伝授をうけ、また「高砂の松の古木枯て、其根の土中に埋れしを掘得て板となし、これを文台に造り、紹巴、昌叱（大日本史料の引く「花房越後守正幸之記」では、幽斎・道悦・紹巴）をして連歌の三つ物をなさしめ蒔絵にし」之を徳

川家康に献じた（新訂寛政重修諸家譜　巻第九十）と伝えられる。三部抄は、定家の孫、為氏から出る二条家の保守的な歌学において重んぜられ、定家の作と仮託されているもの。

11　十六番歌合判（本居宣長自筆　写）縦二六・六×横一八・一　8128

藍色の紙表紙。左肩に「十六番歌合判本居宣長自筆」との題簽がある。袋綴。もと判紙判の楮紙に記されてあったものを美濃紙の台紙に貼り、改装したもの。墨付九丁、一面十一行、一行二七字程。国民精神文化研究所、月明荘、等の印記がある。奥書が八丁裏にあり「此歌合巻、よき歌共おほく見え候て、いとうれしく候也。古人の入候故歟。もし今の人々の歌にても候はゞ、御稽古の御たゆみ候はぬしるしとおぼえ候て、愚老も殊によろこび候事也」と記してある。これによれば、歌合本文に作者は記されていなかったものの如く、宣長も古人の作か、今人の作か判断しかねたようである。内容は、歌の題、月前梅、夕立雲、野草花、尾上時雨の四題十六番の判詞のみである。歌詞が伝わらないのは遺憾であるが、宣長の判詞のみを別冊に記したものは例が他になく珍しい資料ではある。九丁裏に所持者の識語「此書明治廿八年十二月三十日本居秋屋先生所恵送也」とある。秋屋（あきのや）は本居豊穎（とよかい）（一八三四年～一九一三年）の号で、本居大平の家系に伝来したものであり、或いは、宣長が大平に書き贈ったものかとも思われる。本居宣長（享保一五―一七三〇―年～享和元―一八〇一―年）は伊勢国松坂の人で、国学の大成者としてあまりに有名である。和歌・歌学を国学の階梯として重んじ、歌合の判詞も多く伝わる（六十番歌合評、刈谷図書館蔵、当館紙焼き写真C三〇二三。等）が、本写本は門人の示した十六番の歌合に、自筆の判詞を別に書き記して贈ったものと思われる。

12　覚了法師集（嘉永七―一八五四―年写）縦二七・〇×横一九・〇　8123

伴林光平の弟子、覚了法師の歌集。薄茶色の紙表紙。左肩に無字白紙題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。墨付一九

丁、一面八行、一首一行書き。長平珍賞、国民精神文化研究所、月明荘の印記がある。序は「嘉永七とせといふ年の五月……中略……伴の林光平しるす」と結ばれるが、それによると、光平（文化一〇―一八一三―年～文久三―一八六四―年）の歌道の弟子であり、若くして鬼籍に入った覚了法師の「わすれかたみ」として兄なる人の集めたものを光平が一帖に書きとめたのだという。歌数は百二十一首よりなるが「春はきぬ庭の池水おとす也　みきはの氷今やとくらん」とか「つく〳〵とおも出(ママ)して村雨に　しくれはてたるわかたもと哉」といった類型的な未熟なものではある。しかし、光平はその将来を嘱望していたとも記している。なお、光平は幕末の勤王家でもあり、国学、歌道に志しつつも、天誅組を組織し、大和十津川に挙兵したが敗れ、京都六角の獄中で他界した人であった。

13　百人一首燈（富士谷御杖自筆　写）縦二五・〇×横一七・四　　81 24

百人一首の注釈書。富士谷御杖の自筆稿本。藍色の紙表紙。左肩に「百人一首燈草稿」と記す白紙の題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。本来十二行の罫紙（二三・四×一五・八）を貼り装釘を加えたものである。四六丁、罫一行に二行書き。国民精神文化研究所、月明荘の印記がある。一丁表に「百人一首登裳新備　平安　富士谷成元述」の内題がある。天智天皇御製の始めの歌から八十一、後徳大寺左大臣「ほととぎす鳴きつる方を……」までの注であり、墨消し等が散見して正に草稿の姿を示している。本書は、御杖（明和五―一七六八―年～文政六―一八二三―年）が独自な歌学説の立場から著した百人一首の注釈で、文化元年に刊本が出されている。刊本は、「おほむね」と歌の釈義とから成るが、語句そのものの注釈は極めて少なく、歌の傍に俚言を添えた程度で、もっぱら歌の詠まれた環境や事情を解明し、著者独自の表現論を主張することを主眼としている。なお、本草稿は、前述の如く八十一までとどまっている他、「おほむね」を欠き、本文も刊本と相違するところが多く、刊本に至る学問体系の進展を窺うよすがとなっている。昭和十二年刊『富士谷御杖集』第二巻所収。

14　北辺迭瑣式（富士谷御杖自筆　写）縦二一・二×横一四・八　81 45

よせあひ、という歌あそびの法を記す書。本文料紙と同じ楮紙の表紙。表紙に「北邊迭瑣式」と打つけ書き。和綴。料紙は楮紙。全十丁、墨付八丁。序にあたる部分、一面八行、「よせあひのうた」は一面、墨五行、朱五行の十行、「集古摘三」は八行である。北辺は富士谷の号であり、あるいは、北辺流の迭瑣（かわるがわるつらねる）歌の法をとく書でもあろう。序にあたる部分によれば、「つれ〳〵なる日、あるすきものまうてきて、さけのみものかたりなとするついてに、あはれおもうとちまとゐして、うたよまぬこそ春の山に鶯なかぬこゝちすれ、されとありとある人うちそむきたるやうに、むこにものもいはて、おもうちわつらはして、おのかしゝうめきふくれなとはさるへき折ならてはいとたへかたしや……」と、興ある場にも、「ところせき」歌でなく、興ある歌をよみたいものと言うと、主人が、「かくし題の歌のことわり」にもかよい、「くさり連歌のさま」にも似た「よせあひ」というあそびの「のりをかきつけてみ」せたものだという。以下、実際の例、具体的説明を記すのが、「よせあひのうた」「集古摘三　迭瑣十首」の部分である。なお、「迭鎖式の序　安永五」として、序にあたる部分のみが『富士谷成章全集』下巻に翻刻されている。

15　於伊勢大神宮御千句両吟発句四季大永二年八月四日（永禄十―一五六七―年奥書　写）縦二三・六×横一七・六　99 12

伊勢千句注の前半部のみの零本。極薄茶地に牡丹模様（中央金糸）の入る緞子表紙。題簽なし。列帖装。料紙は鳥の子。墨付一一五丁、一面十行、一行二五字程。巻末に「永禄十丁卯年六月廿八日　長韻（花押）　右大事之本にて候へ共数年無御等閑申兼候間写遣了　相構而他見あるへからす候」と記す。また一丁表に「館河内守正虎法名長諳何船朝日影　一冊（琴山の墨印）」と記す極札が貼られている。この長諳は、たぶん楠正虎（永正十―一五二〇―年～慶

長元―一五九六―年）であろうか。『顕傳明名録』巻第八の正虎の条に「楠長諳。俗名也、従四位下河内守《全》前司橘氏　法名治部卿法印長諳初ハ大饗長左衛門　天文比『信長公右筆也楠正長息』」とあり、天文五年、一七歳で足利義輝に仕え、和歌を実隆、連歌を宗牧にならう等、多芸に秀でていたが書は夙に名筆の誉れがあったという。天文二二年以後、楠氏、後に松永久秀に仕え、主の滅亡（天正五―一五七七―年）後、剃髪し長諳となのり、以後、信長・秀吉の祐筆をつとめた（『大人名事典』平凡社）とするならば、本写本の写年永禄十年には、長諳と署名するはずはない。また『顕傳明名録』巻第五の長韻の条に「肖柏門弟堺《連鈔》哥師」とあり、永正十五―一五一八―年以後に堺に居住した肖柏の弟子（『明翰抄』第四十一堺連歌師の項に「長韵。同。」―牡丹花門弟を言う―とある。）があるが、年代が少し古くに過ぎよう。諸説に喰い違いがあるが、一応、楠正虎のこととし、仮託の可能性を残しておく。ともあれ、本写本の巻首題は「於伊勢大神宮法楽御千句両吟發句四季　大永貳年八月日」と記す。内容は「第一、何船。第二、三字中略。第三、何路。第四、薄何。第五、何人。」からなり、高国朝臣一句、宗長（文安五―一四四八―年～享禄五―一五三二―年）二五〇句、宗碩（文明六―一四七四―年～天文二―一五三三―年）二四九句という、いわゆる『伊勢千句』前半であり、注が付されるもので、『伊勢千句注』の上冊（前半部）が、正式呼称となる本である。なお、金子金治郎博士の『連歌古注釈の研究』によれば、この注は第一種内閣本の系統に属するものの如くである。しかし、朝日影の句に関してみると、第一種系の本文を全て有し、なお、証歌をひいての増加部分が介入している。全体的にこれと同じ傾向がみられるので、第一種増注本とでも呼ぶべきものであろうか。

16　連歌比況集（天文十一―一五四二―年写）縦二七・一×横二〇・六　99 13

連歌論書。茶色地の紙表紙。題簽なし。袋綴。料紙は楮紙、裏打ちがある。全三三丁、一面十行書き。奥書きに「右相州小田原妙覚（光の誤写か）院居住之砌於南向部屋書之抑連哥故實不可過之聊尓不可在他見者也此書根本者関

東公方様江追而被申と傳侍りし　天文第二暦癸巳霜月十八日書之　以本写之　連歌比況集　兼載作　天文十一壬寅六月日　七十七　兼懌書之」と記されている。通説は宗長（文安五―一四四八―年～享禄五―一五三二―年）の著とされ、小田原妙光院で述作し、兼載（享徳元―一四五二―年～永正七―一五一〇―年）の校閲をうけて名付けたとされる。関東公方（管領―上杉憲政）宛に、連歌稽古、付様の用心、故実から会席の作法までを、問答形式を用い、比喩的に事物にたとえて解説したものである。蓮の茎、五尺昌蒲、夜の柱、以下大的まで四十三箇条よりなる。なお、書写者兼懌に関しては不詳。

17　連歌新式追加并新式今案等（文亀元―一五〇一―年奥書　写）縦二八・九×横二〇・八　9936

連歌の式目（吟詠のため守るべき禁制故実）書。薄青色地の紙表紙。題簽なし。列帖装。料紙は鳥の子。全三二丁、墨付二九丁。一面八行、一行二十～三十字程。二六丁表に「新式今案奥書……中略……享徳元年丑申十一月日関白御判（右に「後常恩寺殿」と注付があるが、常は成であり、一条兼良の奥書きと知れる。）」と記される。また三〇丁表に肖柏の奥書きがある。「應安以来新式之今案之追加条々并近代用捨篇目等依其端朱（末の誤写か）学常迷商量而今彼是勒以為一冊但猶未一決之事或暫漏之或先載之以侍後君子志同者従之亦宜乎　文亀辛酉林鐘上澣　夢庵居士肖柏（丸形朱印あるも判読不可）」。なお、一丁裏、左肩に「牡丹花肖柏連哥新式（養心の墨印）」その裏に「一冊己酉五（神田道僖の朱印）」と記す極札が貼られている。本書は応安新式（二条良基（元応二―一三二〇―年～嘉慶二―一三八八―年）の制定、後に追加）に、さらに一条兼良（応永九―一四〇二―年～文明一三―一四八一―年）が新式を加え、後に肖柏（嘉吉三―一四四三―年～大永七―一五二七―年）が内容を追加し、整理改修して成立したものだといわれている。本写本は、奥書と本文が別筆と思われ、室町末頃の写かとは思われるが、肖柏筆の可能性は薄い。

18　休聞抄（慶長一五―一六一〇―年頃写）縦二六・五×横二一・四　五四冊　9935

源氏物語注釈書。薄香色地の紙表紙。題簽はなく、巻名を左肩に打付け書きにする。袋綴。料紙は楮紙。丁数は省略。行数は、本文の冊が一面、七行、九行、十行、注の冊が一面十二行等と一定しない。奥書は、葵（六アヲヒ　七サカキ）の注の冊末尾、明石十の注の冊末尾に「此正本者豊臣朝臣堀尾三介泰長公之御袋従長松院殿申請國造千家元勝書寫早　慶長十五年庚戌年正月吉辰日」と記されている。出雲国造第六十七代に慶長元年に就いた千家元勝の写を含むものである。堀尾三介泰長は、高階の末流堀尾吉晴の孫、忠晴（文禄四―一五九五―年～寛永一〇―一六三三―年）であろう。忠晴は、出雲松江藩主、母は前田徳善院玄以法印（豊臣家五奉行の一人）の女。祖父吉晴が天正一三年に、小牧役等の活躍により豊臣の姓を賜わっており、忠晴は小字を三介と言う。この写年の翌年、徳川秀忠の一字を賜わり、元服し「泰長」を「忠晴」と改名したものでもあろう。本写本は、桐壺巻首に「休聞　源氏物語聞書」とあり、休聞抄と判断される注だけの冊と、朱で語の傍注等を簡略に記す部分を持ち（聞書きのテキストとして用いられたと思われる）、巻頭に巻名のこと内容摘記、巻末に奥入を持つ本文の冊との二本立てとなっている。注の冊は、桐壺、帚木、空蟬、若紫、紅葉賀、葵、花散里、榊、明石、蓬生、絵合、松風、薄雲、乙女、玉鬘二部、初音、胡蝶、螢、篝火、の一九冊であり、本文は、桐壺から鈴虫まで断続して三十五冊である。その本文は、たぶん河内本系に近く、『源氏大成・校異編』の別本系により近く、青表紙系からは遠いと、管見の限りでは言える。右の冊の状態からも考えられるように、何筆かの手になることは明らかで、あるいは、一つの講釈の場に用いられた何種類かの本を単純に五四冊にとりあわせた、とも想像される。なお、休聞抄は昌休（天文二―一五五二―年没）の著になり、その跋文によると、河海、花鳥、弄花の注を収捨し、宗祇から宗牧にいたる今案の注をのせたもので、天文一九年の成立という。

19　源氏小鏡（永禄五―一五六二―年序　写）縦二五・五×横一七・七　二冊

源氏物語梗概書、道安本。金茶に瞿麦の模様を織り出した金襴表紙。中央に「こかゝみ自桐壺至真木柱（自梅枝至夢浮橋）」と記す黄土色の題簽を貼る。列帖装。料紙は鳥の子。墨付、上冊九五丁、下冊八三丁。一面九行、一行二十三字程。「青谿書屋」等の印記がある。序の末尾は「……見る人これをまなへる道安く世にもてあそはむ本意も長くたいらかならむ事をおもへるなるへし　旨　永禄五暦八月日」と結ばれ、「道安く」、道安の永禄五年の序のある本、道安本と称している。沙弥道安（明応九―一五〇〇―年～永禄八―一五六五―年に六六歳）は「顕伝明名録によれば、泉州堺の連歌師であって、同地の連歌師宋訊（肖柏門弟、河内屋、号湖信斎）の聟となり天王寺屋を号した」（寺本直彦「源氏小鏡作者説の吟味」）人であった。伝本には、他に京都大学図書館本、跋文の奥に「永禄八年八月十四日沙弥道安六十六歳」と記す桃園文庫本、等がある。小鏡は、中世、近世における源氏物語のダイジェスト版のうち、最も流布し、連歌用書としても読まれた。増補、簡略化と、多様に変貌したものだが、この道安本は、本来の小鏡が有していた歌数百十首余の上に、更に百二十首余りを加え、叙述も大幅に改変したものである。その事情は、序「……たいらの長ひら……中略……これをあひかたらひめをかり筆をやとひかつくかきつくるつゐてにまきくの哥ともあまたかき入こと葉をもおほくかきくはへなとするほとにちやう数かさなりぬるを……」とあるところからも覗える。

20　夜寝覚物語（江戸初期以前写）縦二四・九×横一七・一　五冊　131

改作本夜寝覚物語。水色地に水玉を抜いた如き部分を持つ紙表紙。中央に「夜寝覺物語一（～五）」と記す白紙の題簽を貼る。列帖装。料紙は鳥の子。墨付第一冊八三丁、二冊九九丁、三冊六〇丁、四冊四五丁、五冊五六丁。一面十行、一行二十二字程。「たか春の花のしをりにしのはれんわかわけくらすけふの山ふみ中邨秋香」、「今泉文庫」、「眞木園圖書記」等の印記がある。巻五巻末に「此夜寝覚物語五冊以拾遺百番歌合所乗歌二十首訂之其内二三見此物

語以是案之疑有落脱乎後日求全本可勘之者也　于時宝暦第六十月四日　平入道兼誼（判）」と記されている。これは旧蔵者のもので、他に秋香の識語が各巻末に入る。改作本の伝本は、この中村本の他に、巻三までの零本ながら三条家旧蔵本が知られ、神宮文庫に巻二、宮内庁書陵部に巻一、巻三が分蔵されているものが知られるだけである。改作にかかる『夜寝覚物語』は、本来の形が持つ主題「寝覚の御なからひ……」が、風流人の夢を論じる例として語り始められるのを始めとして、かなりの改作が加えられるが、大筋の変化は認められそうもない。よって、本来の本が持つ欠巻部分を想定する好材料となっているが、そればかりでなく、物語における改作を考えるための好事例でもある。次項目と同様に金子武雄氏によって翻刻されている。

21　我身にたどる姫君（室町末写）縦二七・五×横二〇・〇　八巻四冊　132

鎌倉時代の物語。青色地の紙表紙。外題はなく、毎巻本文第一行の肩に「我身にたとる姫君一（〜八）」と小書する。袋綴。料紙は楮紙。各巻墨付、巻一、三二丁、二、二三丁、三、三七丁、四、三九丁、五、三八丁、六、三八丁、七、三七丁、八、二一丁、で各二巻一冊。各冊、一面十二行、一行二十三字程。奥書、印記の類はないが、九条家旧蔵本である。伝本には他に、宮内庁書陵部蔵本（影印本、古典研究会叢書　第二期）、前田育徳会尊経閣文庫蔵本がある。その関わりは、九条家旧蔵本が比較的誤脱が少なく、前田家本はこれに次ぎ、書陵部本は漢字の使用が極めて多く比較的に誤脱も多い、また、対校の結果としての実情は三本相互に補正し合う点、共通誤脱も相当に残存していて、三本間には極度の差異優劣は認め難い（後述、全注解、等）とされる。内容は、皇后と関白との間に生まれ、山里で密かに育てられている主人公、わが身にたどる姫君の一生の物語というよりも、姫君を一員として含めた或る時代の宮廷模様とでもいえよう。なお、鎌倉時代の物語としては数少ない『我身にたどる姫君物語全注解』が、徳満澄雄氏によって出されている。また、本写本も、次項目と同じく、金子武雄氏によって翻刻されている。

22　恋路ゆかしき大将（室町末写）縦二七・〇×横二〇・〇　四巻一冊　133

鎌倉時代の物語。青色地の紙表紙。外題はなく、毎巻本文第一行の肩に「恋路ゆかしき大将一（〜四）」と小書する。袋綴。料紙は楮紙。各巻墨付、巻一、二六丁、二、二六丁、三、二八丁、四、九丁。一面十二行、一行二四字程。奥書、印記の類はないが、九条家旧蔵本である。伝本としては、本写本の他に桂宮本（桂宮本叢書　物語二　所収）が知られるだけである。この物語は、本来五巻と判断され、そのうち、巻四後半と巻五を、本写本は欠いている。だが、そのうち、巻四末尾と巻五の冒頭を佚脱してはいるが、本写本の欠く部分が、桂宮本で知られる。また、両写本は重複しないのである。成立は鎌倉時代後半期（金子、後記書）で、『国書総目録』のいう室町は妥当ではない。内容は、理想とする女性を求めてあくがれさまようという、いかにも王朝風な貴公子三人の三様なる恋愛生活を描写した物語である。源氏物語の藤壺と紫上の関係を連想させる恋路ゆかしき大将の恋愛――しるべあるくものかけはしふみもみず　恋ぢゆかしきわが心かな――によっての書名と考えられる。「夜寝覚物語」「我身にたどる姫君」と同様に、本写本も金子武雄氏によって翻刻されている。『物語文学の研究―本文と論考―』（笠間書院）が、それらを纏めて収載している。なお、三本の写年代推定は同書による。

23　物語書目備考（文政七―一八二四―年序　写）縦二七・九×横一九・三　134

物語目録書、伴直方自筆稿本。薄茶地に白の横筋を流す紙表紙。左肩に「物語書目備考附録」と打付け書き。袋綴。料紙は楮紙。墨付二四丁。一面、上部三分の一程に頭注が入る、十一行程。二丁表に「中川氏蔵」の朱小円印、「眞木園圖書記」「金子」「洒竹文庫」「伴氏家印」の印記がある。二丁表から序にあたる「物語書目備考のおほよそ」が記され、「文政七年八月伴直方」と止まる。四丁表に「物語書目備考伴直方」とあり、以下イロハ順で物語名が配列される。その物語名には、頭注、傍注が朱、墨で多く記される他、付箋も三枚付されているが、おおむね関連

資料の抜書である。そして最後に増補部分が加わっている。見返しには朱で拾遺百番歌合の物語名と歌数が記されていた。『物語艸子目録』に翻刻されている国会図書館本は、増補部分を配列に組み入れた形になっており、頭注等を本文化した東北大学狩野文庫本も知られている。その他、岩瀬文庫、九州大学等、伝本がいくつか知られるが、本写本は、それらの源流となる草稿本（付箋と頭注の重複部分もみられる）である。なお、本写本の付箋になる注が、翻刻本では簡略化されるケースもあった。

24　平家物語（寛永元―一六二四―年刊古活字版）縦二六・九×横一九・八　十二冊　99 19

寛永元年道意刊本。改装にかかる薄紫細格子地の紙表紙。左肩に打付け書きで「平家物語一（～一二）」と記す。袋綴。料紙は楮紙。各冊一巻、十二巻十二冊。各冊、丁数は略す。一面十二行、一行二十一字程。平仮名交りで、字面の高さ二四・五センチ程。各冊一丁表に「慥齋圖書」（山田聴―文化年間の人で佐野藩の儒者―の印）の印記、他がある。刊記は「比平家物語一方検校衆以吟味令開板之者也　于時寛永元年五月初一日　落陽三条寺町　道意」と記されている。なお、巻末に「弘化三年閏五月十七日一閲畢比苧之」の識語がある。『古活字版の研究』上巻、五三四頁によると、江戸時代流布印本（一方流本）の祖をなしたものの一つである十一行本に依りつつ翻印を行ったもので、久原文庫（巻八欠）、牧川鷹之祐氏蔵の二本、そして増補で追加された安田文庫の三本が知られるという。因みに、本刊本は、同書図版四〇二と同一であり、この版の伝本を追加することにもなろう。

25　曽我物語（寛永中刊古活字版）縦二八・三×横二〇・五　十二冊　99 20

青色地に電格子紋の紙表紙。左肩に「曽我物語」の題簽の痕跡がある。各冊一巻、十二巻十二冊。袋綴。料紙は楮紙。各冊、丁数は略す、一面十二行、一行二七字程。平仮名交りの小型活字を用いたもので、字面の高さ二三・七センチ程。一～五冊、八冊、十～十二冊の見返し等に「房州佐の村荃」の円墨印、巻末に「月明荘」、また六冊に「苅

谷圖書」の印記がある。刊記の類はない。印記の状態からも推察されるように、本刊本は、伝来を異にする二種の本を取合せて揃いとしたものである。一種は「月明荘」等の印のあるもの、もう一種は、上下裁断し、裏打ち改装して、前者と同寸法とした第六冊、七冊、九冊の三巻である。しかし、双方、寛永中刊古活字本と判断できる。『古活字版の研究』上巻、五四八頁によれば、同種活字印本には寛永十七年刊左大将六百番歌合の他頗る多いといい、この版には異植字版も存し（イ）図版四四二、（ロ）図版四四三の二種があるともいうが、少なくとも巻一は、そのどれにも属さない異植字版と認められる。

26　太平記（寛永元―一六二四―年刊古活字版）縦二九・一×横二〇・四　四一冊　99 18

平仮名交り附訓十一行本。茶色地の紙表紙。中央に「太平記一（～四十）」と白紙に四周双辺の題簽を貼る。目録一冊、各巻一冊の計四十一冊。袋綴。料紙は楮紙。各冊、丁数は略す、一面十一行、一行二〇字程。平仮名交りの附訓漢字を用いたもので、字面の高さ二三・四センチ程。「春翠文庫」（佐藤仁之助）の朱方印記がある。刊記は「于時寛永元年南呂下旬　開板之」とある。『古活字版の研究』上巻五四二頁によれば、振仮名附の漢字を混用することを初めて試みた慶長十四年刊本を、後に覆刻した一本が本刊本で、活字の様式が若干趣きを失った他は、版型等の全く相似したものという。また、太平記は、国文学書中で最も早く開版されて、重版の数も最も多いが、特に本文を異にするものはない、そして平仮名交りの印本は慶安三年の活字印本を合せても三種に過ぎない、とも同書はいう。

27　太平記（古活字版）縦二八・〇×横一九・九　二一冊　99 34

片仮名交り十二行本。栗皮色の紙表紙。題簽なし。剣巻と目録よりなる一冊、各冊二巻の四十巻二十冊、計二一冊よりなる。袋綴。料紙は楮紙。各冊、丁数は略す、一面十二行、一行二三字程。同類ながら二種の取合せ本である。一種は四周双辺無界で匡郭内縦二一センチ、横一六・八センチ。もう一種は四周単辺無界で匡郭内縦二二・三セン

チ、横一六・八センチである。ともに片仮名交り十二行本。前者は慶長元和中刊と考えられ、後者（巻一、二の第二分冊、巻五、六の第四分冊）は『古活字版の研究』下巻九四七図と似るところから、元和寛永中刊別版としてよかろう。「胠」字を二重円がかこう墨印が後者二、四冊にある。刊記の類はない。前者十九冊のうちには「本主相原徳充求」との同様の識語を持つ冊が、いくつかある。また版の推定とは別に、後者の方が比較的に刷りはよいようである。太平記において「慶長十五年刊本より、片仮名本にのみ初めて剣巻が附刻されるようになった。」と同前書はいう。なお、六分冊、巻九の二八、二九丁が綴じ違いで前後が逆になっている。

28　住吉物語（江戸前期写　大型奈良絵本）縦二八・九×横二三・八　三冊　99 39

紺地に金泥砂子、金切箔を散らす紙表紙（破損し、上冊のみ、その姿を残す）に後補の楮紙（上冊うすい藍緑色、中冊極うすい桃色、下冊極うすい黄色）を貼付した表紙。各冊中央に「住吉物かたり上」「すみよし物語中」「墨よしもの語下」と能筆の打付け書き。袋綴。料紙は鳥の子。墨付、絵ともで、上冊二三丁、中冊二二丁、下冊二四丁。上冊、一面九行、一行一七字程。中冊、一面九行同上と、十行二二字程。下冊、一面九行同上、十行同上、そして十一行二三字程である。各冊は一筆と判断でき、絵の入る部分等が先に決定していて、以後に筆写するといった方法の無理が出たと考えられる。絵数は上冊七図（六、七図は見開き）、中冊六図、下冊八図よりなる。画一的な絵だが保存は比較的よく、絵画の剝落は少ない。伝本は、基本的に広本系と略本系に分類されているが、本写本は、そのうちの略本系統と考えられる。また略本系のうち吉野弘隆旧蔵本（国会図書館蔵）に近いもので、和歌の所収状況や歌詞は、慶長元和頃刊の古活字十行本（内閣文庫蔵）に最も近いと考えられる。しかしまた、古活字本所収和歌の三、四首が欠けており、歌の変容も認められる。一方、ほぼ前記古活字本によっていて下冊中途から他の伝本と関わるとの見方もある。住吉物語は、平安時代諸作品にその名を記されている継子虐め譚の代表的な物語である。しかし、現存

するものは、中世以降の改作改変の後、室町物語化されたものに限られているようである。改作改変の激動は、諸伝本の複雑多岐なあり様からも知られ、本写本の如きにおいても、伝承内容や書承経路も単純とはいえないであろう。あるいは、他の物語のその様相を総合化し、いくつかの層に分解（貴族・連歌師と和歌、語りの集団等）して考えた方がよいのかもしれない。

29　うたたねの草紙（室町末期写　奈良絵巻）縦一五・三×全長六七三・一　一巻　99 30

室町時代物語。茶色地に菊・宝珠、等を織り出した金襴表紙。料紙は斐楮の混漉き（鳥の子）。間二合で裏打ちがされていて、改装にかかり、一部分に剪除が認められる。題簽、奥書の類はない。絵は、奈良絵風の古寂なもので四図ある。箱書に「夢草紙（「うたたね」のルビが付されているが、墨色等から判断し後付と思われる）詞書宗祗法師光信畫」と記されている。本絵巻は『室町時代物語大成』第二に翻刻された神宮文庫本『うたたねの草紙』（表題「うたゝね物かたり」）に対校本として用いられた「うたゝね室町末期絵巻一軸」と判断できる。同書解題を参照されたい。ただし、改装にかかる時の剪除と認められるのは、本文に関しては一ヶ所である。それは、絵第一図のあと、大成本五四一頁下段「さやかに……」から次頁上段一二行目「……かくまて」で、同書による二七行程にあたる。また、一行程の欠脱がある二ヶ所は、目移り等、書写段階での誤まりであろう。前述した箱書の記述は信をおけないが、本絵巻の成立とは関わりがあろう。光信画とする絵巻が、他に存在する。それは高松宮本絵巻（館蔵紙焼写真本による。猶『中世文学―資料と論考―』昭和五三年に石塚一雄氏による翻刻がある。）であり、別筆の識語「右假寝之繪一巻者土佐刑部太輔光信真筆無異論者也仍加愚筆證薦而已　元禄元年初冬中旬　法眼常昭（藤原の印）」がある。常昭は、光長、光信とともに土佐三筆と称せられる土佐光起（元和三―一六一七―年～元禄四―一六九一―年）である。また『高松宮御所蔵旧有栖川宮御本マイクロフィルム目録』（宮内庁書陵部編　昭和四四年）によれば、飯尾

元連筆、土佐光信画と記されているものでもある。元連（永享三―一四三一―年～明応元―一四九二―年）は、室町幕府奉行人、新左衛門尉、大和守、のちに宗勝と号した人で和歌の嗜もあったらしい。手は書風からも室町中期と考えることができ、絵も光信（永享六―一四三四―年～大永五―一五二五―年）かどうかは別としても、土佐派のものに違いはなかろう。この高松宮絵巻も絵四図を持ち、本絵巻と同位置に配され、場面絵柄も改変はされるもののほぼ同様である。館蔵フィルムのある神宮文庫本、三手今井本は、本文のあり方から判断し、高松宮絵巻（欠脱は考えにくい）の流れに立つものと考えられる。とすれば、本流となる高松宮絵巻（室町中期）から何らかの関わりを受け、奈良絵風に絵画化され（目移り誤写等、少し雑な書写）室町末期に成立したのが本絵巻、と一応はいえるであろう。伝本としては、他に『古物語類字鈔』〔無名物語―本藩秘蔵の古巻軸〈上下二巻〉鑒定家證書云「飛鳥井雅親卿（法名栄雅・一四一七～一四九〇）息女一位局書畫一筆」〕の言う本（ボストン美術館蔵本と同一もしくは極めて深い関係がある）、続群書類従の底本とされる国会図書館本、『国華』七八六、七八七（昭和三二年）に楢崎宗重氏によって紹介された白描絵巻（絵面の高さ一三・六センチ――この絵巻は、現在、ワシントン・フーリア美術館に蔵されている由である）、『新修日本絵巻全集』32・在外篇Ⅱ（昭和五六年四月、米倉迪夫氏による論あり）等に紹介されるボストン美術館蔵白描絵巻二巻（絵面の高さ上巻一三・五、下巻一三・六センチ――フーリア美術館蔵本とは例えば模写等の極めて近い関係にあろう）が知られている。

『実隆公記』文明六―一四七四―年十一月五日の条に「雪降、為按察卿番代参内、夢語絵小詞於御前写之」との記述がある。他日の記述に「小絵」「小絵詞」とあるのを参酌すれば、前引の条は、「夢語小絵（小絵詞）」の可能性がある。本絵巻も「小絵」というにふさわしいものであり、伝本も全て小絵で、文明年間と高松宮絵巻成立との年代も近かろうから、あるいは『夢語絵』をもって書名とするべきかもしれない。ただし散佚物語『うたゝね物語』『夢

がたり物語』（ともに風華和歌集所載）の本物語との関わりは想定できそうもない。また時代は下るものの「仮寝の絵（うたたねのえ）」（高松宮絵巻）と呼ばれた事実、冒頭「うたたねに……」をもって題名とすることがよくあること。それらからも、箱書「夢草紙」を「ゆめがたりのそうし」と関連づけることは慎重である必要があろうか。なお、本物語は、小町の歌によって起筆した恋物語であり、夢にみた人を恋し、石山観音の利生によって、姫君の入水（浮舟の模倣）を契機に、めでたく夫婦となり、末栄える、といった内容であった。

30　八幡宮縁起（文正元―一四六六―年奥書　写　絵巻）縦二七・五×全長一三八九・三　一巻　99 29

室町物語化した寺社縁起。濃い藤色地に瑞雲、菊、法輪の模様の入る緞子表紙。本文料紙は楮紙。絵九図（本来は十図）。奥書に「奉寄附大日本国周防国吉敷郡□□□（貼紙に「吉敷郡秋穂郷」とある）今八幡大菩薩御宝殿者也施主心中求願一々皆令満足故也　于時文正元年丙戌十二月二日施主敬白」と記す。冒頭（約四、五十字）および中間（約一二〇〇字および図一）を欠落している。本文は享禄四（一五三一）年絵巻（横山重編『神道物語集』所収）と同類で、記事の出入や順序の異同はなく、絵の位置もほぼ同じである。また『室町時代物語類現存本簡明目録』の諸本分類A、B㈠、B㈡のうち、B㈠に属する本文である。なお、平安初期から中世、近世にかけ宇佐、石清水などの八幡信仰が盛行するにともない、八幡縁起や詫宣記が多く作成された。それらは他の神社縁起に比し変化に富むことを特徴とする。本絵巻はそのうち室町物語化したものの一つである。内容は八幡の祭神応神天皇の母神功皇后の三韓征伐を冒頭に、道鏡事件の和気清麿の宇佐参詣等に関する詫宣説話であり、中世風の奇怪な物語性に富むものである。

31　さゝやき竹（江戸初期写　奈良絵横本）縦一六・九×横二四・三　三冊　99 31

室町時代物語。紺地に金銀泥で雲引き、草木を描く紙表紙。中央に「さゝやき竹上（中・下）」と記す朱題簽を貼る。袋綴。料紙は鳥の子。墨付、絵ともで、上・中冊二三丁半、下冊二十三丁。各冊一面十二行、一行十二字程。絵

は、各冊六図入る。伝本は、本写本の約五分の一ぐらいの簡略な伝本と、本文の細部には語句の出入異同が相当に多いものの本写本の系統のものとがある。前者は、岩瀬文庫蔵本、高野辰之氏旧蔵本が知られている。また後者には、東洋大学図書館本、北野天満宮蔵奈良絵本、実践女子大学図書館蔵奈良絵本（刊本とほぼ同文だが巻末だけが異なる）、宝永二年鱗形屋刊本とが知られている。内容は、鞍馬僧正ヶ谷の地名由来譚である。鞍馬天狗伝説における僧正房や鞍馬天狗の縁由を説いたようなものでもある。破戒僧の失策、仏罰と申し子の出世を対照させた話で、ささやき竹の奇想と長櫃の中の牛の喜劇が特徴となっている作品。

32　からいと（江戸前期写　大型奈良絵本）縦三〇・〇×横二二・〇　二冊　99 14

お伽草子二三冊の一つ。紺地に金泥で草木を描く紙表紙。中央に「からいと上（下）」と記す金泥で草木の入る朱題簽を貼る。袋綴。料紙は鳥の子、これにも金泥草木の下絵が入る。墨付、絵ともで上冊十四丁、下冊二三丁。各冊一面十行、一行二〇字程。絵は、各冊六図入る。本文は、内閣文庫蔵の慶長末頃の古活字十行本（丹緑一冊本）とよく似る。写本は穂久邇文庫本と早稲田大学図書館本がある。他に刊本の伝来は、古活字版から渋川版まで多くある。本写本は内閣文庫本以下の江戸初期丹緑本系統の本文の系列に位置するもの、あるいは、その転写本とみてよかろう。内容は有名な孝子譚。木曽義仲の家来、手塚太郎の娘、唐糸の前は頼朝に仕えていたが、父の命により、主君の敵となった頼朝を刺そうとして失敗、石牢に幽閉される。唐糸の子万寿姫は母を救おうと苦心の末、頼朝の前で舞った舞の褒賞として唐糸を許してもらい郷里へ帰る、というもの。

33　しつか（江戸前期写　大型奈良絵本）縦二九・八×横二一・五　二冊　99 32

幸若舞曲を読み物としたもの。紺地に金泥で草木を描く紙表紙。中央に「しつか上（下）」と記す朱題簽を貼る。袋綴。料紙は鳥の子、これにも金泥草木の下絵が入る。墨付、絵ともで上冊二三丁半、下冊二四丁。各冊一面十行、

一行一九字程。絵は上冊七図（うち三、四図は見開き）、下冊七図（うち六、七図は見開き）入る。「しづか」の伝本は多く、特に奈良絵本の優品がいくつかある。具体的には、本写本の他、謡い本の写本八種および版本、奈良絵本（天理図書館本、国会図書館奈良絵抜写本、屏風貼付館蔵9917本等）が知られている。謡い本の本文は、幸若系と大頭系に分類でき、奈良絵本もその区分と無関係ではない。天理本は幸若系（京大一本、藤井氏一本等）に近く、9917本は大頭系（秋月郷土館本、上山宗久本等）に近い。また国会本は大頭系であるが、9917本とは別系とみられている。そして、本写本は大頭左兵衛本の系統であり、笹野堅編『幸若舞曲集』所収のものに略一致する。版本には、少なくとも十行古活字本（東洋文庫ほか）、同覆刻絵入整版本、明暦四年刊絵入二冊本の三種がある。内容はよく知られた判官物で、静の鎌倉下り、出生した男子を殺されること、そして鶴ヶ岡の舞楽の史実などを本に潤色したものである。また、景時の胎内探りの部分など、後の作品に影響を与えている。

34　ひおけのさうし（江戸初期写　奈良絵横本）縦一八・二×横二五・七　二冊　9916

室町時代物語。紺地に金泥で杜若、水草を描く紙表紙。中央に「ひおけのさうし上（下）」と記す金泥で小松を描く朱題簽を貼る。袋綴。料紙は鳥の子。上冊十二丁、下冊十一丁。各冊一面十五行、一行十五字程。絵は上冊四図。下冊三図入る。上冊一丁表に「鴻山文庫」（江島伊兵衛）の印記がある。緑地に、金、朱金の格子に宝尽しを織る緞子地の箱状の帙に入っており、帙左肩に「火おけの草紙　寛永頃奈良絵本二冊」と記す題簽がある。記載のとうり寛永頃の写であろう。本文は丹緑本（古典文庫『未刊中世小説』三に翻刻）とほぼ同じである。同種の写本が米沢市立図書館（上のみ）、東大国文研究室（高野辰之旧蔵本）に所蔵されている。内容は妬婦譚の一種である。翁の愛玩する火桶を、嫗がねたみ留守中に割ってしまった。それに対し、帰ってきた翁が種々の教訓譚を語り、嫗をいましめるというもの。引用される種々の説話が興味深い。

35　ほうみやう童子（江戸初期写　大型奈良絵本）縦二九・〇×横二三・七　三冊　99 15

室町時代物語。紺地に金箔散らし霞引きに上冊は梅、中冊松に帆、下冊秋草を金泥で描く紙表紙。左肩に「ほうみやう童子上（下）」と記す青色に上冊秋草、中冊は欠く、下冊松を描く題簽を貼る。袋綴。料紙は鳥の子、これにも金泥草木の下絵が入る。墨付、絵ともで上冊一七丁、中冊二二丁、下冊二〇丁。各冊一面十一行、一行一八字程。絵は上冊七図（うち一、二図は見開き）、中冊八図、下冊六図入る。箱書には、「畫入法明童子　三冊之内　關與三兵衛」と表に、裏には「龍集明治甲戌之辰　關與三兵衛」と記されている。『山田孝雄追憶史学語学論集』（山田忠雄編　昭和三八年　宝文館出版発行）に、「法明童子　富山縣長氏蔵本」の本文影印并翻字　附関与三兵衛所持本覆刻、が大田栄太郎・山田忠雄、両氏の連名で掲載されている。いうまでもなく本写本、関本の翻刻である。本文は、長氏本に比し、増益が大である。また天理図書館蔵「いけにえ物語」（『室町時代物語大成』第二に翻刻）、および岩瀬文庫蔵奈良絵本（上冊のみ）に近いが、やや誤字が目につくのが関本である。他に、より文飾の多くなる版本が五種と、別系に属する古浄瑠璃の正本が知られている。内容は、念仏功徳譚。天竺ちゅうろくに住む法明童子は貧しい母を救うため進んで人買いに身を売る。そして檀毘梨長者の一子の身代りとして大蛇の生贄に立つ。しかし、唱えた念仏の功徳で救われる。そして、親王の位に昇り、母と再会。後は大王となり、末は極楽往生との物語である。

36　十六夜物語（江戸初期写　淡彩絵入本）縦二三・四×横一七・〇　二冊　99 21

十六夜日記（阿仏尼作）の別題の伝本。浅黄地に、菊・牡丹・龍を織る金襴表紙。左肩に「十六夜物語上（下）」と記す金泥引きの題簽を貼る。列帖装。料紙は鳥の子、まま金泥で竹を描く下絵が入る。上冊二三丁、下冊二六丁。一面十行、一行二十字程。淡い彩色のされた奈良絵風の絵が上冊五図、下冊四図入る。小川寿一氏が昭和十四年に記された解説が下冊末尾にある。それが指摘する如く、本文は万治二年刊本に近く、字体の一致する部分も多いが、図

九面を有するのが特徴である。（小川氏によれば寛永正保頃の風俗かという。）万治版本にある四図はいずれも類似の構図で、本写本にもある。但し、それらは元来、現位置にあったのではなく、小川氏が下冊の脱葉を万治版本によって補写された時に、元来の挿図を予定して白紙としてあった面に貼り込まれたものである。上野氏旧蔵。

37　大蔵九郎囃子伝書（天正一三―一五八五―年写）縦一七・六×全長四五七・六　一巻　99 28

鼓の秘伝書。金茶地に牡丹唐草模様の入る緞子表紙。題簽、内題の類なし。奥書に「観世小次郎権守　明應元年二月日在判　大蔵九郎殿　此一札大蔵九郎ヨリ六拾一ヶ条相傳仕也少も不相残書写進候其後高安与兵衛門尉法名道善迄定又所持候へ共同前候間如件　暮松因幡守　永禄拾年霜月吉日　越智通春　天正十三年六月廿六日　重写之早」と記されている。六拾一ヶ条とあるが、実は四拾九ヶ条と半分ほどであり、首部を欠いている。小次郎権守は、観世音阿弥元重の第七子信光であり、大鼓の妙手であったばかりでなく演能にもすぐれ、四世観世大夫であった長兄政盛の死去後、その幼子之重が五世を継いだのを輔佐した人であった。道善は、その流れをくむ大鼓の名手である。本書は道善へと同様に暮松因幡守（越智通春と同一人物）への九郎からの相伝を永禄十（一五六七）年に記したものを、天正十三年に転写したものである。ただし、その伝流からも推される如く、本書は「鼓」の伝書で、『明応元年観世小次郎鼓秘伝書』とも呼ばれるべきものである。なお、同内容を持つ伝本が知られる。「初期囃子方に関する二三の資料―観世小次郎権守相伝秘書と音曲雑説聞書など―」（『中世日本文学の書誌学的研究』堀部正二・昭和二三年）に翻刻された陽明文庫本、また「由良家囃子伝書」の「鼓之書物事」（『日本庶民文化史料集成』第三巻）に翻刻されたもの、それに般若窟文庫の二種がそれである。

38　幸若舞歌謡集（寛永十九―一六四二―年写）縦二四・九×横一八・〇　81 29

紺地に金泥で天地打霞、秋草模様を描く紙表紙。中央に「舞　幸若小兵衛」の雲母引き布目地の白紙題簽を貼る。

墨付四五丁、本文一面八行、題目部分一面十二行。国民精神文化研究所、月明荘、等の印記がある。奥書に「挑井末孫　幸若小兵衛　嵗寛永十九壬午歳南呂中旬　正信（花押）」とある。一、常槃なる松のえたには……から五五、のろしまとまさみの嶋を……までを記す。内容は、「松の枝」「大しょくはん」（二～六）の内、「常葉問答」（七、八）の内、「満仲」（九～十一）の内、等々であり、いわゆる小舞集である。本文（歌詞）に「節、色詞、さし、かゝる」等と記されており、音曲、胡麻節が施され、庵点、句読点も付されている。正信は、幸若如滴の子で、幼名を小次郎といい、幸若小八郎安信の脇をつとめた人。後に紀伊の徳川頼宣に仕え、慶安二―一六四九―年五月、七十歳で没した。なお、本写本は『幸若舞曲集　序説』笹野堅著に、第三章幸若歌謡の正本　第七として紹介されているものであり、笹野氏の旧蔵にかかるものであった。

39　つれつれ草（古活字版）縦二八・一×横二一・〇　二冊　99 33

柿渋色地の紙表紙。左肩に「つれ〳〵草上（下）」と打付け書き。袋綴。料紙は楮紙。丁数は略す、一面十行十八字。字面の高さ、二二、八センチ程。「鈴木」等の印記が各冊一丁表にある。刊記の類はない。下冊見返しに「鉄鎚徒然艸」と朱書。同裏見返しに「世間流布本誤訛数多有之今正文字倭点重令於新刊者也　于明治三年庚午仲冬　正譜字加注者也」の旧蔵者のものと思しい識語がある。なお、本書は『古活字版の研究』上巻五二五頁のいう「㈣慶長中刊十行本」である。同書はつづけて「保元、平治、平家物語等同種活字印本多し。両版の前後は、磨滅度、誤植増加等の精査に據りて㈠㈡の順なること知らる。」と記す。本版本は比較的磨滅の少ない刷りと思われる。言うまでもなく徒然草は、伊勢物語等とともに近世初期に、最も数多く開版された国文学書の一つであり、前記著者によれば十四版に達するという。

40　好色一代男（天和二―一六八二―年刊）縦二四・三×横八・三～四　八巻一冊　99 23

水色地に、紋様菊に唐草の押し型をする紙表紙。左肩に、剝落した題簽の痕跡がある。目録題「好色一代男巻一（〜八）目録」。内題なし。柱刻「男一（〜八）（丁数）」。袋綴。料紙は楮紙。大本八巻を一冊に合綴。巻七まで各二十二丁、うち目録各半丁、巻八は十八丁。本文十一行、跋七行。匡廓四周単辺。本文版下、水田西吟筆、挿画は西鶴。落月庵西吟の跋。挿画は巻一から巻七まで各七面、巻八、五面。刊記は「天和二戌年陽月中旬　大坂思案橋荒砥屋孫兵衛可心板」とある。保存は極めて良好であり、荒砥屋版中、摺のもっとも早いもので、他に類例をみないうぶさ（中村幸彦博士は「試めし刷」「校正刷」といわれる）を持つ本である。『国文学研究資料館報』第四号（昭和五十年三月）に紹介があるので参照されたいが、「現存の『好色一代男』の中で、最善本の一つ」とも、「大げさにいえば、昨日刷ったままの美しさを今日なお保っている。その点奇蹟的といってよい。」ともいわれたものである。

41　名所都鳥（元禄三―一六九〇―年刊）縦二二・二×横一七・三　六巻八冊　99 24

地誌、和歌。紺地の紙表紙。左肩に「名所都鳥第一（〜六）」と後に付された手書きの題簽がある。袋綴。料紙は楮紙。丁数等は略す。但し、各冊に丁付けがあり、題簽巻四は、一〜二五丁、同四上は三〇〜六一丁、同四下は二六〜四九丁、同五は一〜二九丁である。印記は霞亭珍賞、青谿書屋の朱方印、小汀氏蔵書の長方朱印の他二つあり、渡辺霞亭、大島雅太郎、小汀利得の著名士の手を経たものである。刊記は、八冊（巻六）末に「元禄第三庚午歳春二月穀月　洛陽書林　吉田四郎右衛門　丸屋源兵衛　田原嘉兵衛」とある。本来、巻一、巻二、巻三、巻四上、巻四下、巻五上、巻五下、巻六の八冊であるが、本刊本は、後付された題簽に混乱を生じている。混乱部分は、巻四とあるのは実は巻四上、巻四上が巻五下、巻四下は正しく、巻五が巻五上にそれぞれあたる。なお本書は、序、跋の類を全て欠き、山城一国の名所を「山之部」「川之部」等四十一部類に分ち、各部類ごとに郡別の順序に解説を加え証歌を付したものである。この如き体裁は『名所方角鈔』『付合小鏡』等の一部を拡充し詳細化したの観があるが、作歌の参考

に資する証歌を示すあたりからみれば、『名所部類四季景物抄』等の類書に先行するものともみられる。

42　人倫重宝記（元禄九―一六九六―年刊）縦二一・一×横一七・三　五巻二冊　99 37

重宝記。式亭三馬の旧蔵識語本。茶色地に、雲引きの空押しのある紙表紙。左肩に「人倫重寶記乾（坤）」と識語と同筆になる後付の題簽を付す。上冊は巻一～巻三、下冊は巻四、五よりなる。袋綴。料紙は楮紙。「式亭」、「三馬」の印記がある。刊記は「元禄九年乙子初春吉祥日　書林　大坂久保田七兵衛　京中野七三郎刊」とある。識語が、上冊見返しに「文化九年某月某日書林萬茇堂英平吉主より方銀一片をもてあかない得たりしをおなしく十年発酉霜月下浣表装合巻して家蔵とす　式亭（式亭の朱印）」とあり、下冊裏見返しにも「元禄九年より今文化十年に至りて百十八年に及ふ此書益なき冊子なれとも故を温るによしあり（三馬の朱印）」と記されている。元禄期あたりの考現学的な著作である、重宝記（日常生活百科辞典的なもの）の一つであり、『人倫訓蒙図彙』の流れの上にある作である。

43　禁秘抄（慶安五―一六五二―年刊に文政十二、三―一八二九、三〇―年の近藤芳樹の詳細書入本）縦二六・二×横一七・二　三冊　81 17

順徳天皇の手になる有職故実書。黒地の紙表紙。左肩に「禁秘抄上（中、下）」の白紙題簽がある。各冊、丁数等は略す。刊記「慶安五年孟秋吉祥日　土御門通寺町西入町　板木屋　谷岡七左衛門開板之」とある本に、朱によっての本文校訂その他全体に細字による注が入る。「三長記、体源抄、禁腋秘抄」等、古記録、故実書を引く他「案……」の如く私案をも加えている。墨細書の他、朱もあり頭注傍注の他、付箋も多い。奥書は、上冊裏見返しに「文正十二年十二月卅日以山田本校正之訖　田中裕芳樹」中冊同に「文正十三年正月四日以山田本校正畢　田中裕芳樹」とある。下冊には校合に用いられた諸本の奥書が写されている。版本のもの「文明九年……中略……特進通秀、文明十一……中略……従一位政嗣、文亀二年参議右大弁宣秀、……中略……壺安（花押）」と続き、下巻裏見返しに貼紙で

「……略……藤以文在判　文政十三年正月十二日校合之功畢魯魚之訛訂之於山田本一字以私意不加之且考證於古昼而以辨文義之難明云爾　田中芳樹（花押）　天保十五年正月九日以塙本校之　芳樹」と記されている。禁中の故実作法を記す本書は、賢所、清涼、紫宸殿のありさま、恒例臨時の行事とつづけられるものである。前述奥書は、慶安五年刊本のもの、『皇室御撰之研究』のいう写本のもの、壺安（壺井安左衛門義知）、そして山田以文のものであり、後、天保十五年には群書類従本をも校合しているのが本書である。近藤芳樹（享和元―一八〇一―年～明治一三年）は周防国岩淵の生、初め田中源吾と称し、国学を本居大平に、有職等を山田以文に学んだ。『源語奥旨』等の著作が知られている。

44　北山抄（江戸前期写）縦二七・一×横一九・九　六冊　995

藤原公任の手になる有職故実書。紺青色地の紙表紙。左肩に「北山抄巻第一（～六）」と記す題簽がある。袋綴。料紙は薄漉きの楮紙。各冊の墨付、一冊は八一丁、二冊は七二丁、三冊二七丁、四冊五三丁、五冊五七丁、六冊五八丁である。各冊一面八行、各冊一丁表に「安藤北叟」の円朱印記がある。箱書に「今井似閑自筆　契沖阿闍利校正自筆　北山抄　今本六冊」とあるように、本写は、似閑の自筆本に、その師である契沖が朱で校正を加えたものである。本写本は、本来十巻のうち、巻一、二、五、七、八、十と「勘出事」以下の巻所属未勘部分からなる残欠本であり『故実叢書』所収本に比し、その裏書等も記されていない。朱による校正の他、まま墨細字による頭注、割注も多い。各冊はそれぞれ一冊（巻一、年中要抄上）二冊（巻二、年中要抄下）三冊（巻八、大将要抄）四冊（未勘部分、巻十、吏途指南）五冊（題簽に五、六とあるが内容は巻五のみ）六冊（巻七）となっている。本書は、年中行事、及び臨時の朝儀を記し、太政官での政務、近衛大将中将等の作法、国司に関すること等を記したものである。本書の伝本は、和田英松博士によって紹介された（『本朝書籍目録考証』にその稿再録）史料編纂所蔵、三条家本の、「巻十

吏途指南」部分の公任自筆稿本や、前田家本の古写十二巻本、永正古写五冊本、等が知られている。よって伝本的には問題になるまいが、似閑、契沖の自筆であり、その師弟の関わりを知るよすがとしても貴重であろう。

45　書置之事（自筆　写）縦二四・八×全長二三八・三　一巻　99 27

今井似閑の遺言状。焦茶地に、唐草を織り出した金襴表紙。本文料紙は楮紙。巻首に「書置之事」と墨書。享保六年の九月八日の日付けがある。二四・八×二三八・三のものを表装し、二四・八×二九二・一の一巻としたもの。今井似閑（明暦三―一六五七―年～享保八―一七二三―年）は、近世初期の契沖門下の国学者で、和漢典籍の蒐書家として知られている。この一巻は、死去の二年前に書かれたもので、似閑六十五歳の時の手である。宛名は善四郎・お俊・太郎右衛門となっている。内容は、単なる遺産分配に関することではなく、彼等の身の取置、等の些事に到るまで詳細に指示している。長兄・次兄の頃から傾きかけた家運を壮年期の精励によって挽回した似閑の大黒屋（京都代々の両替商）系家長・族長としての一面がうかがえる。この書置は、近世初中期の町人家訓書の系列に属し、細部まで配慮のとどいた記述にもかかわらず、蔵書等に関する記事は、ほとんどみえない。それは、この書置の日付け九月八日に先立つ七月二十日に、三手文庫を賀茂社に奉納している事と関わりがあった。ともあれ、命終の近きを覚悟し、文事、俗事にきまりをつけた死支度のあり方といえよう。似閑の蒐書は、現在、京都上賀茂神社三手文庫、山口県立図書館の二つに、ほぼ分蔵されている。平均的に良質なものが多く、その学者の眼力を偲ばせる。また校本の多い事も注目しておくべきであろう。山口に蒐書の半ばがあるのは、大黒屋が長州藩出入の御用達であったためと考えられる。

46　賀茂真淵書簡（自筆　写）縦一七・八×全長五〇・三　一軸　99 26

市左衛門宛賀茂真淵書簡。一七・三×五〇・三の楮紙を黄色地の紙に貼り表装し、七七・二×六六・一の一軸とし

たもの。賀茂真淵（元禄十一―一六九七―年～明和六―一七六九―年）から真淵の実子で、浜松宿の脇本陣梅谷家を継いだ市左衛門真滋にあてた書簡である。年代未詳。親族の安否や自分の健康のことを記し、歳暮の心配りなどをこまごまと書き、肉親へのこまやかな情があふれていて、真淵の私生活の一端に触れることができる。文中の「小次郎様」とは田安宗武の世子。「御用甚重り」というのも田安家御用のことであろう。宝暦十三年正月十七日付書簡と内容が似ている。内容から、田安家出仕間もないころと思われる。釈文は左の如くである。

尚々五社へ祝儀之書状遣候。治兵衛へ印状も遣候。いば次郎兵衛へも遣候。脇さたにるる聞は神田門之外のはかし不申候。いまた何処ともしれ不申候。こまり申候。以上。　一炭大分入申候にあしく候てこまり申候。可成事に候はゝ冬中二又へ御申おき春早々下り候様にも頼入候。以上。　春と申ては来春の用には立申まじく候。味そを御くだし候のよし悦申候。はやく来れかしと存候。以上。　押つめ候はゝ三方も遣し可申候へども此節はいまだより無之弥如此に候まゝ御身遣候。嘸々当暮心遣察入きのどくに候へども無是非候。以上。

当月十一日出之御状相届弥御無事厳寒被凌力千代も致成長候由大慶に候。お磯正月臨月之由候。其間折節悪候由。寂前も懐胎之間時患被申候由覚申候。左候はゞ却而安産と存候。足袋二足御越候。よく御礼頼入候。我等も秋中痰気には候へども惣躰は随分達者にて顔色等当年はいかふ丈夫にみえ候由人々申候而一日も臥候ほどの事は無之候。併当夏以来御用甚重り日夜に宿に而も考物等いたし一円無寸暇候而日々之様に存候へば書状不遣候。寂前之御状も相届致承知候。一此間御納戸払少々拝領仕候。又　小次郎様之御召ふるしも一つ被下候間力千代へ遣候。冥加之為いたゞかせ候而正月御きせ可有之候。飛脚便に而此度遣候。　衛士

市左衛門殿

47　本居宣長書簡（自筆　写）縦一五・三×全長一四九・八　一巻　99 25

荒木田尚賢宛本居宣長書簡。金茶地に、鹿、猪、唐草を濃緑と金銀で織り出した絹地の表紙。本文料紙は楮紙。裏打ち表装を加えて、一七・九×一七九・七の一巻としたもの。本居宣長（享保一五―一七三〇―年～享和元―一八〇一―年）が安永五―一七七六―年七月三日、伊勢内宮の神官荒木田尚賢に宛てて出した書簡である。その内容は、長文であり、「二宮神宝ノ図」「文徳実録脱簡ノ補」を宣長がみ、不審の個所を別紙に書きつけ返送した事、安芸国の重加流神道家柄崎八百道が宣長を訪ね晤語したこと、春中に参宮を予定したが麻疹流行で沙汰止みになったこと、『古事記伝』六之巻が尚賢から返却され、八之巻を貸与したこと、「字音かなつかひ」を尚賢にみせたこと、また「利益ヲクホサト訓申候事」「景行ノ巻誥ニ於確ニノ事」の古語考証、等からなっている。学問的内容に富み、宣長と尚賢の交渉を見る上にも注目すべきものである。なお尚賢は、同国津の神道家谷川士清の門に学び、その女婿となった人で、賀茂真淵の教えを受けたこともあり、宣長と親交があったが、この書簡執筆時は、まだ鈴屋に入門はしていない。入門は天明七―一七八七―年に至ってからである。本書簡の文字も典型的な宣長の字体で叮寧に記されており、保存も良好である。釈文および内容考証は『国文学研究資料館紀要』第一号・昭和五十年三月に詳細である。

48　宗祇連歌（写）縦二五・一×全長一〇五・〇　一軸　99 22

すきかえしかとも思われるような料紙（楮紙ともみれる）を二枚貼り、二五・一×一〇五・〇にしたものを表装し一一七・三×一〇九・六の一軸にしたもの。全五九韻からなる連歌であり、あるいは百韻の半分程を欠脱したものでもあろうか。末尾に「宗祇（花押）」と記した後に「財部殿□□（判読できず）」とある書簡様の記載がある。この部分、不明であるが、署名が宗祇のみであり、字体、花押も宗祇のものに酷似し（似すぎが逆に偽作を疑わせるとの見方もある）、あるいは宗祇自筆独吟の可能性がないわけではない。内容は、最初の句から「春しつかなる玉たれのまへ　おき出て朝宿みれは霞む野に　ゆくほとときすおちかへりなけ　瀧波のをとはのうへの山こえて　水と

をく澤の螢の暮る夜に　見たらし河の月のすゝしさ　うきほとは先夢にみえけり」と続き、末尾三句は「なく鷹の羽をならふる松の風　まよひゆくなりおく山のかけ　青はよりうち散花の風よはみ」となっている。

国文学研究資料館特別展示目録　五
――館蔵貴重書展――
昭和五六年三月三〇日　発行
編集　国文学研究資料館参考室
発行　国文学研究資料館
〒142　東京都品川区豊町一―一六―一〇